

# 東海大学建築会卒業設計賞 2014

## 審査評



### 審査員 白子秀隆 / 白子秀隆建築設計事務所

全体の傾向として、衰退化した地域の問題点から、人と人との繋がりをいかに活性化させるかといった「コミュニティの再構築」を主題とした提案が多く見られた。しかし、そのプログラムに対して「カタチ」を作り上げていないものがほとんどで、建築における「イミとカタチ」について考えさせられた審査会でした。

最優秀賞の半田案「接地性のある建築」は、路地空間の平面構成の特徴を断面的に展開し、都心部における多層建築の接地性を獲得しようとした提案。「接地性」や「路地」の言葉の定義、青山の敷地の文脈の読み込みが若干、不明確ではありましたが、垂直方向に折れ曲がりながら連続的につながる空間構成が魅力的で、コンセプト止まりの希薄な作品が多く並ぶなかで、突出した「カタチ」の力強さが感じられた点が評価につながったと思います。

優秀賞の野川案「長岡駅前大雁木広場」は、シャッター通りとなった駅前商店街に対して、雁木を基調としたバラバラな屋根の集まりによってできる大きな広場を提案する事で、賑わいのある商空間を再獲得する試みでした。屋根勾配の変化が大空間を緩やかに分節し、それぞれの屋根の隙間から光がさし込む構成であり、街の問題点に対して明解にアプローチし、少ない構成要素の操作で効果的な場所をつくりだしている。同じく優秀賞の三木案「町工場を町に近づける」は宅地開発の進む工場地帯で、工場と住宅との共存を図る提案。既存廃工場のスケルトンのみ保存し、そのガランドウの空間に町の機能が貫入され、隣接する住宅や広場に拡張している。不要となったビルディングタイプがカタチを残し、町に寄与しながら、再編していくプログラムに共感を覚えました。

また、惜しくも受賞とはなりませんでした。山中案と金子案も印象に残る作品でした。

山中案の「0 (ゼロ) - 回復の軌跡」は被災地である石巻の門脇地区の復興計画で、緻密な図面と膨大な模型表現による提案でした。卒業設計らしい力作ですが、高盛道路を仮想 GL として、背後の山の傾斜に沿って地盤が雛壇状にレベルを変え、避難経路を可視化し、街並をつくるというアイデアがあるにも関わらず、配置された施設が箱状の建築として見えてしまうのが惜しかった。

金子案の「路地をぬけたら、、、」は横須賀の商店街ファサードを変えずに1階レベルを減築しつつ、階段状の動線を付加する事により、路地の多様なアプローチを獲得している。雰囲気のある模型で人が自然に集まる公共性がうまく表現された提案でした。

二次審査には残りませんでしたが、小松案と関口案は綿密なサーベイからのアプローチが非常に明解でストーリー作りが秀逸でした。しかし、ともに意図的にカタチを表現する事を避けているように感じられました。コミュニティを再構築する上で、むしろ人と人との関わりにおけるソフトのデザインにウェイトがあるのは判らないでもないですが、かといってカタチのデザインがプログラムを阻害することは無いはず。小松案はその地域にある練堀、関口案は校舎の既存柱と新設される柱との共存、といった手がかりを見いだしているので、その手法をもとに建築の空間を作ってほしかった。もっと建築のカタチに可能性を持ってよいのではないのでしょうか。縮小する経済の中で答えが見いだしにくい時代だからこそ、改めて建築の「イミとカタチ」を思考することが大事かと思いました。